

オオトゲシラホシカメムシ

1 被害のようす

幼虫・成虫ともに登熟期の籾を加害し、斑点米を形成させ玄米品質を低下させる。口器が丈夫であるため、籾を貫通して加害することができる。歩行型のカメムシであるため、被害は畦畔際に集中する。

本県では、本虫は2000年以前は主要な斑点米カメムシ類とされていたが、最近のすくい取り調査結果からみると、他の主要種より斑点米形成寄与率は低いと思われる。

2 発生生態

(1) 見分け方

成虫は体長6mm程度。名前のおおりの前胸背両側にトゲ(側角)、小楯板基部左右に1対の白紋がある。

近縁のトゲシラホシカメムシと酷似するが、オオトゲシラホシカメムシは腹部の濃褐色の範囲が広く、トゲシラホシカメムシは淡褐色の範囲が広い点や、トゲシラホシカメムシでは前胸背前部の点刻に不均一な部分があること等で区別できる。なお、この2種の他に、前胸背にトゲのないシラホシカメムシ等も県内に分布している。



写真 オオトゲシラホシカメムシ成虫

(2) 発生のようす

発生は北日本に多く、北陸以南ではトゲシラホシカメムシが多い。本県の場合、全域で発生が見られる。

発生は年1回で、水田周辺の雑草で成虫越冬し、6月上旬以降イネに集まる。産卵時期は6月中旬～7月中旬で、2列約10粒を水面際の下葉や葉鞘に産卵することが多い。卵期は約10日で、ふ化直後は密集しているが、2齢以降になると分散し、5齢を経て約1～1.5か月で成虫になる。

3 防除方法

周辺のイネ科雑草の管理と本田内での薬剤防除が主体となる。詳細は(「斑点米カメムシの防除対策について」)参照。